

---

# 五の悲劇

二丁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

五の悲劇

### 【Nコード】

N4156T

### 【作者名】

二丁

### 【あらすじ】

倒叙ものの本格ミステリ

(前書き)

第8回ミステリーズ！新人賞に応募しましたが、残念ながら落選となりました。

## 五の悲劇

「彼を殺そう」

きみは特別表情を動かすことなく言った。音楽室の窓からは、夕日が差し込みきみの顔を照らす。陰のせいか、もともと彫りの深い目鼻が普段よりくつきりと浮かび上がっていた。たまらなく蠱惑的だ。きみは柔らかく笑顔を浮かべる。いつもの音楽室、いつもの放課後。

「そんな、殺すだなんて」

「殺したいって言ったのは君だぜ、レイ」

「それはそうだけど。けれどあれは」

きみは優しく手を取った。女の子のような細い指。それをゆつくりと、一本ずつ絡めていく。きみはいつも、そうやって心をかき乱す。小さく首を傾げて、

「あいつの死に顔を見たい、そうは思わないか？」

「……」

「俺は見たいよ。あいつの顔を叩きつぶして、唾を吐きかけてやりたい。くしゃくしゃになったあいつの目の前でレイに口づけしたい。思いつきり、惨めにさせてやりたい」

きみは言いながら手を握りしめる。爪が甲に当たって少し痛い。まるで甘噛みされているよう。官能的だ、けれど嫌らしくはなくてむしる爽やかだった。意図してやっているのだとしたら大したものだ。きみは続ける。

「あいつが憎くないのか？」

「憎いよ、とても」

手を握り返す。目頭が熱くなってきた。忘れようと努めているのに、またあいつのことを思い出してしまう。

緑川五郎<sup>みどりかわ じゅうごろう</sup> クラスメイトだ。横には成長しすぎているのに、縦は人並みよりずいぶん小さい。整列すれば常に前から一番目。目が悪いらしくて、いつも分厚いレンズのめがねを掛けている。本当に牛乳瓶の底のようなめがねだった。フレームが歪んでいるのか、常に斜めにずれている。直す気はないらしい。団子のような顔中に汚く潰れたニキビがびっしりできていて、まるで何かの病気のようにだった。年頃なのだから仕方ないのだろうけど。ときどき思い出したように奇声を発することがあった。何かを思いついたとか、これといった法則があるようには見えなかった。単に周囲の目を引きたいらしい。緑川には友達らしい友達はいないようだった。人畜無害だけれどあまり近づきたくはないタイプ、という風に見えた。あの時まででは。

「声を出さないでくださいね。五木零下<sup>いつき れいか</sup>さん」  
手に持っていたのは小さな果物ナイフだった。おもちゃみたいな小さな刃物。それだけでも体を凍り付かせるには十分に過ぎる凶器だ。

「そう、じつとして。いい子だから」  
緑川はそう言うと、下品な笑みを浮かべた。放課後の理科準備室。ほこりの臭いが鼻をつく。放課後になるとこのあたりの特別教室は人気がなくなる。近くで活動している部活もないし、理科の先生だつて補講がなければやってはこない。ちよつと大声を上げたところで誰にも届きはしないだろう。

五木さん、あなたの恋人になりたいんです。  
緑川にそう告白された。こんなほこりっぽい部屋で、色気も何もあつたもんじゃない。ぼくはずつとそうなれたらいいなつて、思ってたんです。五木さん、と同じクラスになってからすぐにそう思うようになりました。

そんなこと、言われても。

当然断った。

どうしてですか……どうしても、駄目なんですか。

緑川は食い下がった。顔が赤くなっていた。刺激しない方がいい  
と思っ、なるべく傷つけないように断ろうと言葉を選んだ。

わたしね、他に付き合ってる人がいるんだ。好意を持って貰  
えるのは嫌じゃないし、嬉しいけど。あなたとはそんな関係にはな  
れない。

ことさら“嬉しい”という単語を強調した。怖々、緑川の反応を  
伺う。今にも泣きそうな目をしながら緑川は足下を見つめていた。  
ゆっくりと目を上げる。

誰なんですか、零下さんの彼氏って。

どうしよう、言ってしまうって大丈夫なのだろうか。はぐらかせば  
逆上させることになるかも。今はなるべくそっけない態度を取らな  
い方がいい。

隣のクラスの子。五十嵐君、判るかな？

ああ、あの。

緑川は舌打ちした。顔についた贅肉が歪み、じつとりと汗が滲む。  
緑川はそれを舐め取ると、

あんな奴、止めとけよ。まだぼくの方がいい。

急に口調が乱雑になる。まずいな、と感じながらも言葉を探す。  
だんまりを決め込むのは得策とは思えない。

彼はいい人よ。少なくともわたしにとっては。

あんな青春ぶつちぎれ野郎、付き合っても、疲れるだけ  
だよ。

そう言いながらポケットに手を突っ込む。どきりとしたが、取り  
出したのはただのティッシュだった。鼻をかむと丸めてゴミ箱に放  
る。

ぼくに乗り換えてみませんか。首を縦に振ってくださいよ。

丁寧にももう一度断ると「緑川は仕方ないな」と呟いて、別のポ  
ケットからナイフを取り出した。

「ぼくはね。こう見えても根気強くて、気の長い方なんです」

果物ナイフを右手で器用に弄ぶ。手品師のコインのよう。「もう一度お願いしましょう。五十嵐とは縁を切って、ぼくの恋人になっ  
ていただけませんか」

「そんなの突きつけられて、首を縦に振ると思うの？」

出口へ走るには緑川の横を透らなければいけなかった。窓もはめ  
殺しなので無理に逃げるのは難しい。

「承諾して貰えないのなら、ぼくはあなたを襲いますよ」

緑川は溜息をついた。

「穏便に自分の手に入れられないのなら、一度きりでもあなたをも  
のにしてみたい」

頭が段々白くなっていく。物をまともに考えられない。もう捨て  
鉢でも首を縦に振ってしまおうか。とりあえず今をしのげれば後は  
なんとでもなるはずだ。

ゆっくりと、首を振ってみた。

緑川は満足げに顔をほころばせた。

「それ、しまってください」

声が震えていた。とんでもない一線を越えてしまったような、そ  
んな気がする。

「こいつですか？ まあいいでしょう」

緑川は気取った調子でナイフをポケットに突っ込んだ。にやにや  
と笑みを浮かてこちらを見つめる。歩み寄ってくる、後ずさった。

「心外だなあ、逃げないでくださいよ」楽しそうに緑川は言う。「  
ぼくたち、もう恋人じゃないですか」

顔に手を当てられる。脂ぎった汗が気持ち悪い。胃の辺りが熱く  
なる。トイレに駆け込みたくなった。後のことも考えず思いっきり  
手を払った。払ってしまったから、背筋に冷たい物が走った。殺さ  
れる、反射的に小さく悲鳴を漏らした。

「痛いなあ」

緑川は大げさに手を擦ってみせた。

「けど許してあげます。ぼくはね、なかなか優しい男なんですよ。どうしてもてないんだろう。やっぱり顔のせいかな」

「予定があるの、もう帰らせて」

「え、駄目ですよ。駄目に決まってるじゃないですか」

背中に壁が当たった。もう下がれない。頭を撫でられる。生ぬるい息が顔にかかった。ニンニク臭い、日替わり定食を食べたな。どうでもいいところに思考がいく。泣きそうだ。

「ぼくの口、臭いかな。もしそうだったらごめんね」

ニンニクの味が口に広がった。そのまましばらくの間、気色の悪い軟体生物の味を噛みしめなければならなかった。

それからきみは具体的な方法を練った。シンプルなやり方がいい、そうきみは言う。

「凝ったトリックは自爆を招くだけだ。交通事故にでも見せかけるのが本当は一番いい」

けれど、きみは続ける。

「それじゃあ嫌だ。それだけじゃあ俺は満足しない。この手で、あいつを、ぶちのめしてやりたい。君の唾液を味わった舌を僕の手で抜いてやりたい。君の体を漁った手をへし折ってやりたい」

「そんな、危ないんじゃない」

「そうしたいんだ。リスクを冒してでもね。それほど大きな危険つてわけでもないんだ。証拠さえ残さなければね」

「警察が、わたしと緑川のことを嗅ぎつけるかも。そしたら絶対疑われるよ」

「推定無罪、だ。動機がばれてもボロさえださなきゃ大丈夫。おまけに俺たちは未成年だしね、強引な捜査は向こうだって尻込みする」

確認するよ。

きみは改まって言う。

「五木零下さん、俺は緑川を殺したい。君への行為を許せない。君



「はいつをどうしたい？ 殺したい？」

使う言葉とは裏腹に、きみはとっても優しい笑みを浮かべた。指を絡ませる。

殺してください。

そう答えた。

きみが選んだのは、郊外にある廃工場だった。学校からほんの少しの距離にある廃墟。幽霊が出るとかで、好きこのんで近づく人はまずいない。

「寒いな。まだ冬には早いってのに」

きみは白い息を吐く。深夜一時過ぎ、虫の鳴き声だけが周囲に響く。コオロギかな、それともスズムシ？

二三日、緑川と仲良くしておくんだ。満更でもなくなってきた、っていう風にね。

大丈夫かな、怪しまれるよ。

心配ないよ。君に対してはいつはまともな思考なんてできない。ちよつと好意の欠片を見つければ、手前勝手に解釈してくれる。

あの工場に誘えばいいのね。

そう、幽霊の噂を確かめたいとも言えはいい。二つ返事で喜ぶよ。もし駄目だったら別の方法を考えよう。無理矢理連れ込んでもいいしね。

結局、拍子抜けするほど上手くいった。緑川は、絶対に行く、と脂汗を浮かべながら言った。

楽しみだ。幽霊か、いいよね。ぼく、結構そういうの信じちゃう質なんだ。

臭い息を吐きながら鼻歌など歌い始めた。畏とも知らずにおめでたい奴。

「遅いな。約束の時間は過ぎてるんだけど」

きみはまた腕時計を確認する。これで五回目だ。落ち着きがない、

まあ当たり前だ。これから殺しをやるうというのだ。落ちついていられる方が異常なのだろう。入り口からは見えないよう廃材の裏でじっと隠れていた。狭い空間に身を押し込め、獲物をじっと待つ。

「コーヒーが飲みたい、火傷するほど熱いのを」

なんとか平常心を保とうと、きみは言葉を紡ぐ。万が一、タイミング悪くやってきた緑川に聞こえないように掠れるような小さな声で。

じっとしてられないのか、軽く柔軟運動をする。十分くらいそうしていると、扉が軋む音がした。きみは息を整えながら様子を伺う。きみの手には錆びの浮いた鉄パイプが握られている。この廃工場場で手に入れた物だ。

工場にあるものを使おう、凶器から足がつくのが一番怖い。

大量生産の安物ならそこまで神経質にならなくてもいいだろうけど、一応ね。

「遅れました。零下さん、もう着てる？ 怒ってない？ ちよつとうたた寝しちゃってさ、急いだんだけど間に合わなくて……」

足音がする。中に入ってきたらしい。がらがらと扉が閉めながら緑川は懐中電灯を点けた。

「いるのかな？ 返事してよ」

周囲を照らしながら中へと進む。今ゆっくり出て行けば、後ろを取れる。

「見てろよレイ。たまには格好つけさせてくれ」

きみは覚悟を決めて、廃材の裏から出て行った。足音を立てないよう慎重に。息を殺して背後に近づく。鉄パイプ握る手に力がこもる。気配に気づいたのか、緑川は立ち止まった。

「零下さん？」

「死ねよ、豚」

きみは思いつき鉄パイプを振り下ろした。鈍い嫌な音が響く。

「いい音だ。心地いい」

きみは呟くと、尻餅をついた緑川に追い打ちをかける。まずは腕

だ。枝を踏み折るような音がした。緑川が豚のような悲鳴を上げる。  
「レイに、よくも、下劣な。豚は死ぬ。豚は太るか死ぬしかない」  
振りかぶって顎を打った。関節が砕ける。緑川は歯を吐いた。

「五十嵐……零下さんは、ぼ、ぼ、ぼくくのものなんだ」

「なんか言ってるぜ、レイ。笑つちまうよ。無理矢理襲っておいでさあ。頭がおかしいんじゃないのか」

きみはそう言うと、緑川の後ろに回って後頭部にパイプを打った。  
「後悔してるか？ もう遅いけど。俺は絶対許さない。せいぜい苦しめ、簡単には死なせないぞ！」

急所を外しながら、きみはパイプを容赦なく振り下ろす。興が乗ってきたのか、きみは鼻歌を歌いながらリズムを取り始める。緑川は痙攣しながら血を吐き、やがてゆっくりと命を薄めていった。きみは死体を仰向けにさせた。

「死んだか、あつけないな。もつと痛めつけたかったのに」

きみは唾を吐こうとしたけれど、思いとどまった。証拠を残してしまう。代わりに顔面に最後の一撃をくれてやる。鼻っ柱が潰れ、顔が破れた紙のようによくしゃくしゃくになった。きみは鉄パイプを放った。せいぜいと肩で息をする。

「殺してやったよ、レイ」

きみはとつても、柔らかく笑った。

「大丈夫さ。証拠は何も残さなかった。何度も確認したんだ。心配することはない」

いつもの音楽室。いつもの放課後。

「わたしたち、とんでもないことしちゃったよ。家に帰ってから、やつと実感が沸いてきて……」

「泣く必要なんてないよ。悪いのは向こうなんだ」

外はざあざあ降りの大雨。ときどき雷のストロボが光る。その度に音楽室の灯がぱちぱちと点滅した。きみは優しく頭を撫でる。

「お昼のニュース見た？」

「いや、今日は食堂に行かなかったから」

「死体見つかったって。詳しくは判らなかったけど、工場の持ち主が何かの用事で今朝あそこに行つたんだって……わたし、ろくにご飯も食べられなかった。生きた心地がしなくて……」

「見つかったのか」きみはちよつと驚いた。「他に何か言つてたか？」

「まだ詳しいことはよく判つてないみたい。深夜に殺されたらしいつて言つてたくらいかな。午後にも解剖に回されるとか」

「そうか……けれどもまあ、遅かれ早かれ見つかるさ。こんなに早くになるとは思わなかったけれど。別に慌てることはない」

「本当に、そうかな」滲んだ涙を拭う。「怖いよ 帰つてから少しだけ眠つたけど、夢に出てきたんだ。あいつの潰れた顔が、頭にこびり付いちやつて」

「最初だけだ。じきに気持ちも楽になるさ。こうしなきゃ、またいつあいつに迫られるか判つたものじゃなかったら。周囲の人に知られたくないとも言つたじゃないか。だったら、これでいいんだ」

「……ごめん」

「どうして謝るんだ。謝られるようなことは、されてない」

きみは指を絡ませた。「大丈夫。そうだ、今度の日曜さ」

肩越しにきみは音楽室の扉を見た。誰か、が来たらしく少し隙間が空いていた。ぞつとする。もし聞かれていたら

「誰か、いるんですか」指を離して、きみは立ち上がった。「聞こえてるんでしょう。誰ですか」

扉が開いて、男が入ってきた。中肉中背のくたびれたコートを羽織つて眠そうな目をしている。よく見ると、きみほどではないけれど割と整つた顔立ちで、目の隈さえなければまあまあ見られる。教職員は首から教員証をぶら下げているはずなので、学校の関係者とは思えない。

「立ち聞きですか？ 趣味が悪い」

きみの声は少し、震えていた。男と目が合わせられない。視線は落ち着きなく泳いでしまう。冷静に、と思うほど墓穴を掘ってしまえそう。きみが何か言おうと口を開くと、男は小さく欠伸をして、「いや、私は今来たところで特に何も耳にしてはいないよ」

肩が凝るのか、首を大きく回して間接を鳴らす。

「ええと、邪魔だったかな。悪いけどちょっと協力して欲しいんだが」

「うちの先生ではないですね」

「うん。全員の顔を覚えてるのか？ 凄いな」

「教員証、ぶら下げてませんか」

なるほど、と呟いて。結局許可を貰わずに中へずかずか入ってきた。きみはどうしたものかと困り顔。だけど結局諦めて、扉を閉めた。

「私は一応、こういう者なんだけど」

男はポケットから黒い手帳を取り出した。きみはそれをちらりと横目に見て、

「警察ですか」

「県警捜査一課 警部 にちやう 二丁健司。警察手帳にはそうある。」

「あまり驚いていないようだな」

「うちの学校の生徒が、死んだと聞きましたから」

「あれ、そこまでニュースでやってたっけな」

きみの顔が青くなる。確かにそうだった。昼間のニュースでは高校生とは報道されていたが、具体的な学校名までは流されていないかった。どうしよう、なんとかしないと。

「あの現場、うちのすぐ近所なんです」 助け船を出す。「だからうちの生徒なのになって、今、ええと……五十嵐君と話してて」

「ああ、なるほど」

二丁は納得したのかしないのか、どうでも良さそうに返事をする。と、近くの椅子にどっかと腰を下ろした。

「なんだかなあ、最近腰が痛くてね。一応まだ二十代なんだが」

「二十代で警部？ キャリアですか？」

きみも元の椅子に戻る。探りを入れるような口調だ。なんとか自然に振る舞おうとして、とりあえず言葉を交わそうとする。

「キャリアじゃない。けどまあ二十九だから、ちよつと早い程度だ」  
欠伸を漏らして、二丁は内ポケットをまさぐった。「煙草、吸ってもいいかな」

「今時高校はどこも全面的に禁煙ですよ」ときみ。だいぶ冷静さを取り戻していた。「協力して欲しい、というのはその死んだ生徒のことなんでしょうか」

「ええ、そうですそうです。ぜひお話を聞かせていただきたくて。

えーそれですね……あなた、五十嵐君。それにあなた、五木さん」  
「それ、田村正和の真似ですか？」ときみ。

「法月綸太郎だ」

よく判らないことを言いながら、二丁は手帳を開いた。「まあ、

そこはそれ 君らの推測した通り、亡くなったのはこの生徒だ。君たちの話を聞かせて欲しいんだが」

「はあ……」調子が狂う、きみは心の中で呟く。「まあできる範囲であれば協力しますよ。レイ 五木さんも、いいね？」

「え、うん。もちろん」

とってつけた笑顔で答える。不自然だったかな、そう思って二丁の表情を伺ったけれど、何も読み取れなかった。雷が光る、二丁のシルエットが後ろの黒板に焼きついた。きみは頷くと、

「だ、そうです。何がお聞きになりたいんです」

「亡くなったのは、緑川五郎という生徒だ。知ってるかな」

「名前くらいは。以前同じクラスだったことがありますが、ほとんど話したこともなかったと思います。特に友人と呼べるほど親しくはありませんでした」

「そうか」二丁は生返事をして、「君は？ 確か今も同じクラスだよな」

「え、ええと。はい、そうです。同じです。緑川君とは同じクラス

で勉強させてもらってます。いえ、ました」

「ふうん」

また生返事。眠そうに目元を擦る。「仲は良かったのかな」

「腰を折ってすみませんが」きみは話の間に割って入った。「僕や彼女は容疑者なんですか？」

「どうしてそう思う？」さも不思議そうに二丁は言う。「過剰反応じゃないかな。一般的な質問事項を片づけていつてるだけだ。そう片意地はることはないよ」

「仲が良かったとかどうとか、まるで僕たちが……」

「過剰反応。それとも疑って欲しいのか？」やれやれ、と言いたげだ。「殺したって自白したいの？」

「殺してません」

「ならそうカッコしなくていいじゃないか。気楽にやろう、世間話をするようなもんだ。人の不幸を肴にしてさ。そういうのって、悪趣味だけど盛り上がるもんじゃないか」

「反吐が出ますね。そういうの、嫌いです」

「ああそう。立派だ、尊敬する。いや本当に。からかってるわけじゃない。で 仲は良かったのかな」

二丁は話を戻した。きみは目線を窓に向ける。雨はとても止みそうにない。いまましい雨だ、きみは咳く。

「雨もいいものだと思うけれど。で、五木さん？」

「あ、はい。ごめんなさい。仲は……そうですね、別に悪くはなかったですけど。あんまり話すことも……なかったかな。その、機会があんまりなかったから」

「そう。ま、そんなもんだろうな」

しつこく話させたくせに、二丁はメモすることもなく聞き流す。一度聞けば頭に入る、ということなのか。

「緑川君は、どんな人だった？」

「影の薄い男ですよ。人畜無害な」きみは答える。

「私は五木さんに聞いたんだが ま、いいか。人畜無害ね。案外

腹の底は判らないものだが」

「失礼ですね、亡くなった人に。別に親しくなくても不快になりません。仮にも同級生だったんですから、少しは気を回してくれてもいいんじゃないですか？」

「他意はない。気に障ったなら謝ろう。ただちよつと……」

二丁は結局何もメモせず手帳を閉じた。

「五木さんに言い寄りでもしたんじゃないか、って気がただけだ」  
「それは……どういう……」きみは拳を強く握った。額に汗が滲む。

「気がただけだ。これも他意はない」

「誰かがそう言ってるんですか？」

「気がしただけ、そう言わなかったかな。聞いたのならちゃんと聞いたと言っよ」

「あの、警部さん」

ボ口を出す前に、なんとか注意をそらさせた。

「二丁だ。役職で呼ばれるのは好みじゃないな。昔は好きだったんだが、 “警部” って響き。コロンボに憧れてこの道に入ったよ  
うなものだから」

「ええと……じゃあ二丁さん。緑川君とは、そんなことは」

「ちらりと目線をきみに向ける。きみは一瞬迷ってから頷いた。」

「確かにそんなこともありました。断ったんです」

「それは最近のこと？」

「最近です。つい一週間ほど前です。けど話は穏便に済みましたよ。丁寧にお断りしたら、緑川君は諦めてくれました。“これから友達でいてくれると嬉しい” って。そりゃあ前よりちよつと意識するようにはなりましたが、それで恨まれるとか、そういう風なことは全然ないです」

「追い詰めるような言い方して悪いけど、さつきは話す機会も特になかったって言ったよな」

「えっと、それは本当と言えば本当です。特にお互いゆっくり話す機会はそのときくらいなもので、いつ好意を持たれたのやら。なん



だかびつくりしちゃいました」

「ああそう。まあ、よくある話　なのかな？」

「どうでしょう。よく判りません」

「断ったのは、五十嵐君がいるから？」

「え、まあ。その　そうです。はい」

「そうか。いや、これも特に他意はないんだが。ところで君、昨夜は家にいたのかな　」

「やっぱり容疑者扱いじゃないか」きみは抗議する。「アリバイだなんて」

「誰にでも聞くんだよ。君、ドラマ見ないのか？　古畑とかさ」

「あいにくテレビは観ない主義で」きみは鼻を鳴らす。

「あの、アリバイならあります」

「えっ？」

二丁はポカンと口を開けた。「　あ、そう。あるんだ」

「はい。わたし、なんていうか。昨日の夜全然眠れなくて。こっさり家を抜け出して近所の漫画喫茶に行っただです」

「漫画喫茶、漫画喫茶ねえ……」呪文のように二丁はぶつぶつ繰り返す。「漫画喫茶か、店の名前は？」

「“サニーサイドエッグ”という店です」

「ゆで卵じゃなくて目玉焼き？　後で当たろう。店にいたのは何時時から何時まで？」

「十二時から、五時までです。それから家に帰りました」

「なるほど、判った。住所か電話番号は判ると助かるんだが」

聞いた電話番号を空で復唱して確認すると、二丁はきみに目を向けた。きみはじつと二丁を睨む。

「で、君の方は？」

「あいにく　家で寝てました」

「簡潔明快、非常に助かる。彼女はあが、彼氏はない」

「要するにレイにアリバイ作らせて、僕が殺したと考えたいわけですね。僕なら彼女の目の前で、殺してやりたいって考えるけど」

「だから過剰反応だって……まあいい。で、五木さん。もう一つ質問だ」

「はい」次第に慣れてきた。意識しなくてもたぶん自然に質問に答えられる。

「どうして君はそれがアリバイになると判ったんだ？」

「えっ……」

頭が真っ白になった。血の気が引いてく。きみの顔を見ると、引きつけを起こしたみたいに目を大きく開けて、口をぱくぱくさせていた。

「ならないんですか……？ なります……よね？」

「判ってないな。確かになるんだ。君の話の裏が取ればアリバイは成立する。死亡推定時刻は昨夜午前一時から午前三時。文句なく成立する。けどね、君にそれが判るわけがないじゃないか。解剖は午後になってから行われて私もついさつき報告を受けたばかりなんだ。昼のニュースで流れる道理がない。どうして君は自分にアリバイが成立することを知っていたんだ？」

二丁は微笑んだ。たぶんサディストなのだろう。きみに助けを求め。音楽室が凍りついたように感じる。二丁だけが上機嫌だ。

「レイ、昼間のニュースのこと。思い出せるか？」

きみは腹をくくった。

「え、うん。だいたいはい思い出せる」

「さつき確かこう言ってたよな。深夜に殺されたらしいってことは流れてたって」

「そう……そうだ、そうなんです二丁さん。ニュースでそう流れるのを観て。たぶんアリバイになるだろうって。そう無意識に思っちゃって」

「彼女は十二時から五時まで漫画喫茶にいたって言ってますよね？ それって一般的に“深夜頃”と言うような時間にはすべてアリバイがあるという風に見ることができません。少なくともレイはそう考えた。そうじゃないって、証明できますか？」

「なるほど、確かにそうだ」

二丁は笑顔を崩さない。

「そういうことなら納得だ。詰まらない邪推だった。不快だったなら謝罪しよう、悪気はないんだ」

あつさりと手を引いて、二丁は頭を掻いた。別に運動したわけではないのに、きみの息は荒くなる。

「後は……そうだな、とりあえずはこんなところかな。いや、参考になった。感謝するよ。雨も止んだみたいだ。そろそろお暇する」

二丁の言う通り雨はいつの間にか止んでいて、さつきまでの嵐が嘘のよう。

「またいずれ。邪魔して悪かったね。羨ましいな、こういう青春。私の周りは女つ気が無かったから それじゃあ」

そう言つと、よつこらせ、と年寄り臭く言いながら、二丁は起き上がり眠そうに目を擦る。雲の間から差し込む夕日を浴びて二丁は肩を回しながら音楽質から出て行った。

沈黙。ようやく、狩人から逃げ切れた……のか？

「あの粘着質野郎」

珍しくきみは苛立っていた。大きく深呼吸して呼吸を整える。

「危なかった。誤魔化しきれた、とは思えないけど、決定的なボロは出さずにすんだ」

「わたし……泣いちゃうかと思った」

「死亡推定時刻のあれは、うかつだったね。危機一髪だったよ。いや本当に」

きみは手を握って指を絡ませる。細い血管の動きが伝わってきて心地がいい。

「けど、二丁さんは絶対わたしたちのこと犯人だと思ったはずだよ」というより、たぶん尋問する前にやつぱり立ち聞きしてたんだと思う。どうしたもんかな 気をつけないと。証拠さえ、握られなきゃ大丈夫だ」

「やっぱり無理だよ」涙が零れた。「自首した方がいいんじゃないかな。二人でさ。やっぱりとんでもないことしちゃったよ」

「後悔してる？」

「……虫がいいよね、判ってる。わたしのためにあなたの手を汚させておいて」

「何か勘違いしてるようだから、訂正しとく」きみは手を挙げて続きを押しとどめた。「俺があいつを殺したのは、レイのためって言うより、結局自分のためなんだ。あいつはレイを襲って、俺はそれが気に入らなかつた。だから殺したかった。レイがあいつを恨んで、俺はそれを晴らしたい 結局巡り巡って自分の利益を追求してるんだ。だから負い目なんて感じないで欲しい」

「もうちょつと楽に考えてみようよ。今日はあの警部に足下搦われかけたけど、結局なんとかなったじゃないか。もう今日ほど追い詰められはしないさ。第一レイにはアリバイがある。大丈夫だよ。油断はできないけどね」

「わたしにはあるけど、あなたにはない」

「仕方ない。あのやり方じゃ君にしかアリバイができないんだから」

「取り込んでるところ、悪いけど」

きみは今にも卒倒しそうになった。恐る恐る二人で声の方を向く。「また会ったね。いや、忘れ物をしてね。戻ってきたんだ」

わざとらしく欠伸をしながら、二丁は近づいてくる。きみは思わず後ずさった。

「嫌われたもんだ。気にせず続けてくれよ」二丁はさつき座っていた辺りを調べて、

「おかしいな、気のせいかな。手帳を落とした気がしたんだが」

「あの 二丁さん」

「ああ、あった。何だ、ポケットにあるじゃないか」

二丁はきみを無視して見つけた手帳をばらめくる。わざとら

しい、立ち聞きしていたに決まっている。

「それじゃあ今度こそお暇しよう」

「二丁……」

「どうした？ ああ、私は何も聞いちゃいないから安心してくれ」  
コートの汚れを払って二丁は踵を返す。「仮にだ、仮に私が立ち聞きしていて、本来聞き捨てならないことを耳にしたとしてもだ。証拠にはならないな。ICレコーダにでも録音していれば別か いや、たぶん違法な証拠だと認定されるだろうね。あいにく警察するのは枠組みの中でしか何もできないから」

後ろ手を、ひらひらとこちらに振る。

「まあそういうわけだ。悪いことはするなよ、若人。お巡りさんとの約束だ」

嫌な雨だ、気に入くわない、きみはそう呟く。

今日の天気は昨日以上に悪かった。まるで心中を反映しているよう。音楽史の中までは、雨音は聞こえない。音のない雷を眺めて、きみは何度目かの溜息を吐く。

もうだめだよ。やっぱり二人で警察に行こう。

落ち着こう。よく考えるんだ、何も変わっちゃいない。最初から立ち聞きされたことは判ってたんだ。もう一回されたからって、同じことだ。何か新しいボロをつかませてはいないはずだ。

きみは昨夜、ちゃんと眠れたのだろうか。目の下には酷い隈が張り付いている。二丁よりもずっと酷い。昨日は強がって見せていたけど、やっぱり応えていたようだ。無理もない。

「心配しなくていいんだ、レイ」

きみは力を込めて言う。自分に言い聞かせているのだろう。大丈夫、大丈夫。そう何度も譫言のように繰り返す。この様子では、今日の授業など欠片ほども観に入らなかつたに違いない。このまま一生、あいつのことを背負ったまま、きみは生きていけるのだろうか。

気を許すと二丁の顔を思い出し、段々と追い詰められてしまつのではないか。そのうち自殺しかねない、そう思わせるほど、昨日のとがきみには応えているようだった。

「君のことは、俺が、何とかするから」

きみはゆっくり目を閉じた。疲れが出たのだろう。眠れるときに眠つた方がいい。ゆっくり、お休み。今は、何も考えなくていいから

「悪いけど、起きてくれるか。五十嵐君」

「……あなたですか。ちょっと放っておいてくれませんか」

「そうはいかない」

「俺、昨日のあれ結構堪えてるんですよ。ちょっと今日は、勘弁してください。お願いしますよ」

「起きるんだ、そら。立て」

二丁が強引に体を起こさせる。きみは呻きながら二丁に体を任せ

た。

「しゃんとしろ。あまり好きなフレーズじゃないが、男だろ」

きみはどうにか、自力で体を支える。次第に頭がはつきりしてきた。目の焦点が段々合ってくる。

「……何ですか、尋問ですか」

「いいや、逮捕だ」

「きみは椅子にへたり込んだ。情けない、きみはそう思っているのかもしれない。けれど、きみはよく頑張ってくれたよ。やっぱりもう駄目なんだ、幕を引こう。それがいい。」

「逮捕、逮捕ねえ。証拠はあるんでしょうね、古畑さん。いやコロンボの方が好きなんでしたっけ？」

「証拠か、今度はあるぞ。残念ながら」

「ふうん」

「大丈夫か？ 署に行ったら医者を呼んでもらおう」

「大丈夫ですよ。寝不足なだけです」

きみは両手で頬を打った。

「さ、もう大丈夫です。証拠を見せて貰いましょうか。簡単には納得しませんよ。俺も、レイも」

二丁は後ろに目を遣った。「入ってくれ」

五木がいた。五木零下。きみの恋人。きみに殺しをさせた女。

「君」

きみは後悔しただろうか。裏切り者、そう彼女を罵るだろうか。

「ごめんなさい やっぱり、もう無理だよ。わたし、一生こんなこと背負っていけない」

「彼女が全部証言してくれた」

二丁は煙草を啜える。きみが昨日禁煙だと言ったのに、もう忘れていたのか。

「五木さんが緑川をおびき出し、君が撲殺した。五木さんは君の反抗の間漫画喫茶でアリバイを作った その後で彼女に死体を見せたそうだな」

「……そうです。間違いないです。下手なトリックは、自爆するだけだから。シンプルにやるのが一番いい」

きみは急に疲れが引いていくを感じる。もう終わり、そう知って肩の荷が降りた。レイといっしょなら、捕まってもまあいいか。きみはたぶん、そう思っている。

「後悔は、していません。俺が緑川を殺しました。この手で思いつきり叩きのめしてやった」

「判った、後のことは署で聞こう。取り調べの前に一眠りするとい

い」  
二丁はポケットから手錠を取り出した。おもちゃのような、ちゃんなものが見えた。

「五十嵐公彦。君を逮捕する」

手錠がかかる。たいして痛くないな、きみはぼんやりそう思う。

「ごめんね……本当に。わたし、自分のことばかり」

五木は目をすっかり泣きはらしていた。泣くなよなあ、きみは彼

女に言つてやる、

「泣くなつて。言つたる？ 結局自分のためにやつたんだつて。後

悔なんてしてないからさ」

「だつて ごめんなさい、キミ君」

#### 参考資料

法月綸太郎「二の悲劇」

霧者巧「二、三の悲劇」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4156t/>

---

五の悲劇

2011年5月21日17時40分発行